



I-OWA マンスリー・セミナーより 「ゼロ歳からの経済学」

講演: 岡本 和久

レポーター: 川元 由喜子

経済学の基本中の基本は、世の中には皆が欲しいものを満足させられるだけの十分な資源が無い、言い換えれば、資源に希少性があるということです。経済学が「希少性の学問」といわれる所以です。希少性あるがゆえに、「トレードオフ」の関係が生じ、それが恒常的であるため、人生は選択の連続となるのです。あっちもこっちも取るということとはできないわけです。当然、諦めた方は、選択していれば得られるはずだったものが得られなくなるので、そこに機会費用が発生します。

A か B を選択する時、判断の基準になるのが「インセンティブ」です。金銭的には、価格、賃金、利益、補助金といったもの、また税金、手数料、罰金など、マイナスのインセンティブもあります。金銭以外には、楽しさ、気持ち良さ、名誉や不名誉など。そういうインセンティブを基に人間は選択をしているのです。



選択に関わるものとしてはまず、「予算制約線」と「無差別曲線」があります。座標軸上で、一定の予算を表す直線と、効用が一定になる点を結んだ曲線の接点が、限られた予算内で効用が最大化される最適点であるという理論です。例えば予算 3000 円で、1 杯 600 円のビールと一皿 300 円の枝豆をどう組み合わせで注文するかという話。その意思決定は、1 人、2 人ならば簡単ですが、大きな組織、さらに大きな経済ではどうでしょうか。伝統的な経済であれば昔から伝わる儀礼や慣習など、王が支配する国であれば絶対権力者、社会主義国家では中央当局者による指令配分でした。

これらに対し、市場メカニズムによる配分は、言ってみれば消費行動を通してみんなが選挙しているようなものです。自由度が高く、変化への自然な対応、意思決定の分散化、財やサービスの多



長期投資仲間通信「インベストラيف」

様性といった多くの長所があります。一方で生産性の高い資源に報酬が集中する、時として市場の機能不全が起こる、といった問題を抱えながらも、今の経済は市場メカニズムを基本に動いています。

市場で取引される財・サービスは希少資源であって、空気や水といった無料資源とは区別されます。空気や水は、生存に必要な「効用」を持っていますが、それに対して、市場で高額な値が付くダイヤモンドが主に持っているのは「希少性」です。両者併せ持つところに「価値」が生まれます。その希少性を減らすために生産性が必要になり、「特化」「分業」「人的資本」といったことが必要になるのです。

講演ではこの後、需要曲線・供給曲線を通じた価格メカニズムの理論や、市場の競争についての解説が続きました。後半は GDP の考え方に始まり、物価、失業率などのマクロ指標や財政収支を通して、日本経済の現状について伺いました。最後は、国際貿易の理論について、詳しく解説していただきました。

一つのもので得ようと思ったら、別のものを諦めなければいけない。そのために我慢すること、これは経済学の基本ですが、小さいうちから教わるべきことでもあります。ミルクも欲しいけれどおむつも替えてほしい。でも、どちらかを選択しなければならない。赤ちゃんでもトレードオフに直面しているのです。「ゼロ歳からの」とのタイトルは、そういうわけでした。